

解説1 「生活語詩」運動とは何か

鈴木比佐雄

二〇〇七年九月初め、京都駅前のホテルロビーで有馬敲さんと初めて会った。私は七月中旬に『原爆詩一八一人集』を刊行し、全国の書店に配本し、朝日新聞の「天声人語」など新聞五十紙近くに紹介されて、その反響が一段落したころだった。有馬さんからは『原爆詩一八一人集』が出てからしばらくして『生活語詩集』のことで相談をしたいという申し出があった。有馬さんは長年にわたって、京都弁である「生活語」で詩を書いていく試みを実践してきた。また大阪の詩人島田陽子さんと一緒に「方言」で詩を書くというだけでなく、生きる場所で語られている、生活の豊かな感情やニュアンスを宿している日常語を自覚的に使用した詩作を全国的に広める運動を模索している詩人であると認識していた。私は有馬さん、島田さんが私の子供の教科書にも出てくる方言を用いた詩篇の実作者であり、相当な使命感を抱いてこの運動をされているのだと感じていた。その生活語詩の運動が二〇〇六年に刊行された『現代日本生活語詩集』（濤標）となった初めての成果であったのだろうかと考えていた。

有馬さんからは、京都・大阪の詩人達は自分たちの「方言」にほとんど劣等感を抱くことがないので、すんなり「方言」を「生活語」として感じて詩作することは余り抵抗がない。しかし関東や特に東北では、「方言」に対してもっと複雑な思いがあった。「方言」で詩を書こうとは思わないのではないか。「生活語」で詩を書いて欲しいと言っても大きな壁のようなものがあり、箱根や白河の関を越えて全国的に広がることは容易ではないので、力をせひ貸して欲しいと言われた。近代詩、現代詩が「生活語」を軽んじたり、その根本的な言葉の魅力を自覚化しないことから、現代詩は痩せ細り、我々の古層に潜んでいる言葉のDNAを生かし切っていないのではないかという意味のことを私に語られたのだ。その本来的であり根本的な言葉の力を取り戻すという詩的精神を理解してくれるなら、編集をコールサック社に任せるので全国的にこの『生活語詩集』を広めるために編集・実務を引き受けて欲しいとのことだった。私は仮にこの『生活語詩集』を引き受けるとしたら、『原爆詩一八一人集』と同じような、詩人の「集合的無意識」である共通のテーマ性を掲げて詩を集めたい。私としては「方言」を使用することは望ましいが、「方言」がなくともその地域で使われている山河・湖沼などの地名や動植物名など、また生活感のあるオノマトペを含めた生活語を使用しながら、その場所の自然を見つめ、環境問題、地球温暖化などのグローバルな問題を視野に入れた詩作品を集め、多様で重層的な詩選集にしたいという考え方を伝えたのだ。もちろん前提としては一篇の詩が優れていなければ収録してはならないということを確認したのだった。有馬さんは私の考えや方向性に賛成をしてくれて、『生活語詩集』の企画・編集がスタートしたのだった。

私の詩論集『詩の降り注ぐ場所』I章「場所のエネルギー」の「詩の換喩的な内在批評が可能か」の最終段落で次のように記している。

私は詩を書く際に、いつ、どこで、という時間と場所から促される驚き又は衝撃がなければならぬと考える。その時に意識に立ち現れてくるものを想起し、映像、意味、感情などを再構成していくものこそ「場所のエネルギー」だと気づかされる。「場所」とはアリストテレスの修辞学の「発見」の「場所」（トπος）であり、フッサールの「原故郷」や「生世界」であり、ハイデッガーの「世界内存在」であり、西田幾多郎の主観客観以前の「純粹経験」の述語的「場所」など多くの優れた哲学者たちが意識の根源を考察したことと重なってくる。またこのことに関連して浜田知章が詩論集『リズム詩論のための覚書』で語っている「詩人の本質とは自分が立っている場が世界の中心であるという認識であり、詩の発生も時空のスパークするところにあるのですから。」という論考が想起されてくる。そして浜田知章が詩作は「感動の連鎖状の発展」であり、「内部衝動のある作品を書くべき」であり、「他者のために書く」べきだと言った事とも繋がってくる。「他者のために書く」とは、隣接する存在の感動を物語ることだろう。その際に他者の場を想像していく換喩的認識が大きな働きをするだろう。そのような詩作と思索を一致させて実作を試みている詩人たちは数多くいる。「場所のエネルギー」を明るみに出す換喩的な内在批評がはたして可能だろうか。私にとって大事なことは、そんな問いを秘めながら、すぐれた詩篇や詩人たちと関係していきたいと願うことだ。

私は詩を書き詩誌を出しながらこのような詩論をずっと考えてきた。その意味で詩における「場所」の問題というのが大きなテーマであり、そこから生活する場所からの詩という意味で「生活語詩」を考えることは、自分の詩や詩論においても深いつながりを感じている。

「生活語詩」とは何か、と問うならば、それでは「生活」とは何か、という問いが問われてくる。何気ない自らの暮らしが、問われてくる瞬間がある。そのことを自覚的に詩作することが、「生活語詩」を成立させるための条件であるだろう。私は

「生活」を個人のライフスタイルというような分断された人の群れをイメージするのではなく、ハイデッガーの「世界内存在」という「意味連関の全体」を視野に入れて、存在とは何かと問いを発する存在者たちが生きる場所として「生活」を考えたい。その意味で「生活語詩」とは、自己の取り巻かれてある生きる場所を発見し、それに相応しい言葉で作られる詩であるだろう。その場所から生きることや生かされる経験を率直に問うて、記述することだろう。現代詩を生活から遊離した、高度な隠喩を駆使するという言葉の戯れといった、一面的な修辭学から解放させるためには、古代ローマで集大成された本来的な修辭学の五つのレトリックシステムを思い起こす必要があるだろう。その「発想、配置、修辭（表現方法）、記憶、発表」の五段階において、初めの「発想」とは、表現のアイデアになった存在の驚きを生み出した場所を「発見」することを意味していると考えられる。

いま詩を書き続けているある種の詩人たちは、自分の詩から生きる場所である固有名を消し去り、無人称や匿名に仮託して、普遍性を一挙に獲得したいと願うことによって、逆に現代詩は誰からも読まれない詩人の専有物になってしまったことに自覚的ではない。なぜなら、閉ざされた言語の高度化こそが現代詩の使命だと、倒錯した言語思想に呪縛されてしまっているからだ。そのことは他者との語り合う「場所」を発見するレトリックの根本から余りにも乖離してしまつたレトリックの残骸に過ぎないだろう。かつて現代詩の先鋭的な詩を読んでいて、どうして詩の展開でこの行をもっと固有名や肉声である言葉や手触りのある詩行にしないのか、なぜその生きる場所を消し去ってしまったのか、残念に齒痒く思うことがあった。自らの生活を省みようとしないことは、世界の他者からの視線を削ぎ、自己の真の姿を見る機会を逸している。詩人はその場所を愛する人びとの思いを汲みあげて、もっとその場所で生きる喜びを詩に書いてもいいし、その場所を危機に陥れる状況に警告を発する予言的な詩を書けるはずだ。現代詩はモダニズム詩の問題点を克服するために「生活語詩」の言語思想の重層性を導入することによって、もっと豊かな現代詩に生まれ変わることができないのではないか。読者に読ませる糸口を与えない言葉の実験的な独りよがりの詩群は、言葉を発するレベルに他者への切実な魂の伝達という詩の根源的な使命を入れ忘れているのだ。

その問題点は、詩人が生きる場所への感謝が希薄で傲慢になり、場所を限定しないで詩を書いてしまつたからだろう。「詩を作るよりも田を作れ」という格言は、逆に「田を作るよりも詩を作れ」と芸術至上主義を語っているのであり、詩と生活を別次元のものと考えているのだ。根源的には、「田を作るように詩を作れ」であり、「詩を作るように田を作れ」であるのだ。宮沢賢治はそのような詩作と社会的な農民活動を同レベルで考えていた。昨年コールサック社から発刊した岡隆夫詩集『二億

年のイネ』などは、まさに賢治の詩的精神を引き継ぎながら「田を作るように詩を作れ」を実践したものだ。詩人が生きるその場所から見詰められた切実な光景を書けないはずはないと考える。

私はこのようなことを考えていると、西田幾多郎の次のような言葉が想起されてくる。

私はいつも云ふ如く自覚といふのは自己に於て自己を見ると考へられ、而も自己が見られない所に即ち自己が無となつた所に真の自己を見ると考へられるのである。対象的に見られるかぎり、それは自己ではない、極限として見られると云つても、それは既に真の自己ではない。自己に於て自己を見るといふのは何処までも対象的なものを包むといふことを意味するのである、場所が無となつて行くといふことを意味するのである。極限といふものが見られるかぎりそれが純なる作用といふ如きものであつても、既にその場所が限定せられると云ふことができる、何処までも包むと云はれない、場所が真の無となるとは云はれない。而も一般者が自己に於て自己を限定するといふことは極限点に於て止まらねばならない、既に超越的なものに撞着したと考えられる上に、更に超越的なものを対象的方向に定める一般者を考へることは不可能でなければならぬ。かかる方向に於ては唯単なる無限の過程といふ如きものを考へる他ないであろう。然るに自覚に於て自己が見られなくなる所に自己を見るといふ場合、そこに無にして有を限定するといふ意味がなければならぬ、無限なる一般者の自己限定に対して逆にこれを限定するといふ意味がなければならぬ。かかる意味に於て一般者を包む一般者といふものが考へられるのである、有に対する無ではなく、無にして有を限定する真の無の場所に於て自覚的なものが限定せられるのである。

（西田幾多郎「場所の自己限定としての意識作用」より）

西田幾多郎の「場所」は「有の場所」「相對無の場所」「絶対無の場所」から成つている。この箇所は物質界に基づく共同体、無意識、固有環境などの「有の場所」から、意識作用である「相對無の場所」への過程を論じている。それは自覚Ⅱ「自己の中に自己を映す」であり、「自己が無となつた所に真の自己を見る」ことだと展開していく。「有の場所」の背後にあるが、「無から有を限定する」とは、「無限なる一般者の自己限定」をさらに限定することの豊かさを語っている。限定とは一般者を特殊化し、無限を有限化しながら個別者である本来の自己を場所の中で見出すことを意味しているのだと思われる。これは西洋の主語論理主義から述語論理主義への転換を背後に秘めながら論じられている。詩人たちは共通語の「主語の論理」

の考えだけでなく、「述語の論理」である古層を含んだ生活語をあえて使用することによって、「一般者としての自己」を相対化、特殊化して新たな「無の場所」を探ろうとするために詩作を続けていくのではないか。それは西田幾多郎が真の自由意志を構想していた「絶対無の場所」と類似していると私には感じ取れるのだ。そんな豊かで多様性のある詩人たちの共有する「無の場所」を、「生活語詩」を生み続けていく運動の場所であると位置づけたいと考えている

〔COALSACK〕60号からの再録）

解説2 『生活語詩二七六八集・山河編』覚書

有馬 敲

この詩集の原稿を手にしてまず思ったことは、特定の山河など自然の固有名を用いることによって、生活語詩の新しい世界がくり広げられようとしている、ということだった。

生活語とは、私の考えでは日常の話しことば、具体的には共通語もあれば、地域・年代で異なることばなどである。後者には方言、俗語、芸者語、外来語などが含まれている。したがって詩の世界で生活語という場合は共通語と方言という学問的研究の区分を取りはらって、日常の話しことばやふだんのことば、生の口語ということになる。しかも生活語の変化は、時代の流ればかりでなく、使用する個人の地域や年齢などと密接に結びついている。

このようにさまざまに変化する生活語をいかに自分の語彙として、シンタクスを生かし、独自の詩のかたちにしていくかが、今後の大きな課題になってくるだろう。さいきん、私は『現代生活語詩考』において、ここ数年における生活語の詩についての考えをまとめたところだが、そこでは生活語詩の源流を万葉集の山上憶良の作品に認め、明治以降の口語自由詩、宮沢賢治やそれ以後の詩、太平洋戦争中の伏流、戦後詩の時代、一九七〇年以降から現在にいたる生活語詩の具体例について論じた。

もともと詩のことは既成の枠組を破り、自由であることによって、その特性が発揮できる。したがって共通語の詩の呪縛から解き放つために生活語詩という考えを手がかりとして、今後は詩の思い切った創造に向かうのが必要ではないか。このような考えについては、その一端を「COALSACK」誌59号、60号でも論じた。そしてようやくここに『生活語詩二七六八集・山河編』が実現した。

この発端は二〇〇七年九月上旬、鈴木比佐雄と京都で会って意見交換をしたことによる。その後の経緯については鈴木比佐雄の『生活語詩』運動とは何か（COALSACK 60号）のなかで述べられている。とくに今回の詩集が『山河編』と名づけられたのは、そのときの対話から鈴木比佐雄から提案された。鈴木は刊行趣意書の文中で、『生活語』を用いて新たな詩的世界へ目差す詩人たちへ」と題し、次のように呼びかけている。

全国の山河・湖沼・海岸の固有名を記しそこで暮らす存在者たちを「生活語」で刻んだ過去の詩人の名詩篇と、いま環境破壊・地球温暖化を肌で感じ、人間の環境破壊による「生活世界」の変化や危機意識をバネにして新たな「生活語」で本来的な「生活世界」を構想しよう」と詩作している現役詩人の詩篇を加えた、二二世紀の詩的世界を切り拓くアンソロジーを目差したい。

杜甫は「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と「春望」で書き記した。しかしながら、いま「地球破れて山河なし」という危機的現象が地球規模で起きている。それゆえかつて山河など自然を畏敬し、その地方の固有名を記した名詩篇を集め故郷の山河などを愛する心を再び喚起させたい。さらに暮らしている場所、身近な故郷の山河湖沼、海辺の変化から地球温暖化を感じとり、後世に自然をどうのこすか、また壊してしまった自然をどう回復させるか、多様な方言や風土的・地理的な固有名などの生活語を通しての詩作された批評精神を宿した作品を集めたい。それらの詩群によって日本全国の人びとの暮らしている場所を歴史的性と現在性を交差させて重層的に浮き彫りにさせ、言葉のDNAを後世に伝えると同時に、それを活かした根源的であり未知の「生活語」のアンソロジーを誕生させたいと考えている。

過去の詩人の名詩篇として、例えば宮沢賢治では方言をいれた「永訣の朝」、また地名をタイトルにした「岩手山」などのご遺族や関係者の賛同を得て収録したい。山河などの自然を自己の「生活世界」を成り立たせる重要な基底と考え、自然と対話し自然から語りかけられた自己を生かす知恵を「生活語」として詩に導入することは優れた詩人に試みられてきた。賢治の「永訣の朝」の「あめゆじゆとてちてけんじや」は臨終前の妹トシから吐かれた深層の根源語であり、これこそ愛する存在者から伝えられた最高の「生活語」であり魂の言葉であった。この名詩はそんな「生活語」なくしては、

決して共通語だけでは成立しなかった。このような名詩を、いま編者たちは四〇篇前後、収集・検討している。故郷の詩でありながら、「故郷世界」を超えて「異郷世界」にも通じていき、ついには対立や違和を超え、自然の基底に存在する「原故郷」を目差している優れた詩群を「生活語詩」の試みと位置づけたい。全国の多様な方言が必然的に詩に導入されていることは望ましいが、仮に方言が入っていないくとも、その場所の固有の地名や固有な動植物名など、そこに自生している植物のように言葉のDNAを後世に残す切実な思いがあれば、新たな「生活世界」を構想する「生活語詩」として相応しいと編者は考えている。

自然環境の変化は、ことし六月中旬の岩手・宮城内陸地震のように山が動き山が崩れて山が消える自然災害、ダム決壊などによる二次災害だけではない。地球温暖化や公害による自然環境の破壊が進んでいることはあきらかである。

また、市町村合併で生活でなじみのある地名が消えたり、どこの国のことばか分からないマンションや団地のカタカナ名が生まれたりして、その土地に住む人びとの生活や心を侵したりしている。特定の固有名は、そこに住んでいる人間や動植物などの自然をふくめて、その土地の風物をいっしょにつなぐ紐帯であるはずなのに。

日本の近・現代の詩は象徴派、抒情派、純粹派などのモダニズム、さらにその延長線上の守旧的な詩が、共通語による抽象語や観念語などで、形而上的と称する作品のみにその美学を求めてきた。それらの流れに対して、この詩集では特定の山河など自然の固有名を用いることによって、新しい詩の世界を切り開こうとしている姿勢を読みとってほしい。もちろん、過去の詩人の作品のなかには漢語調や文語調、共通語志向のものがあるが、自然の固有名を用いることによって、生活語詩の系譜につながる作品と認めて、この詩集に収めることにした。

今後、この生活語詩の考え方が現代詩に重要な位置を占めるとともに、後続の若い世代の人たちが関心をもってくれることを願っている。そして土地に根ざした生活語さえも揺るがず地震のような現代の急激な変動に対して、みごとに生き残れる詩の世界が展開されることを期待している。

(二〇〇八年七月)

編者あとがき

鈴木比佐雄

優れた生活語の詩篇には、詩人の個別的経験の小さな私を踏み超えていき、その地域の地霊や民衆の苦悩や喜びである暮らしの共通の基盤と言えものが、その時代の証言となつて宿っている。

本書は、共通語が生まれた母胎である日本の各地域の方言やその土地でしか使用されていない固有名や地名などを用いて、生活に密着し口語を十分に生かし、また自然・環境問題を我がこととして破壊されていく故郷への痛みや再生を願う詩篇などを選び出し、新たに公募した生活語の詩篇を集めた詩選集である。三人の選者である有馬敲、山本十四尾、鈴木比佐雄が物故詩人の詩篇と公募された詩篇を持ち寄り、最終的に『生活語詩二七六人集』とした。選者の三人に多くの助言・推薦をしてくれた各地域の詩人たち、また快く本書の試みに賛同してくれた著作権継承者たち、力作を寄せてくれた全国の詩人たちに感謝の言葉を心から記したい。

先住民のアイヌの詩人森竹竹市から始まり、東北の宮沢賢治、関東の新川和江、中部の浜田知章、関西の志村ふくみ、中国の永瀬清子、四国の岡本彌太、九州の渡辺修三、いまだ米軍基地が集中する沖縄の島々を詠う真久田正まで、全国を九つの地域に分けてその地域を代表する物故詩人の詩篇を初めに置き、現役の詩人たちは多少の前後の入れ替えはあるが年齢順に配列されている。北海道は十四人、東北は三十九人、関東は六十二人、中部は二十五人、関西は四十五人、中国は三十七人、四国は十四人、九州は三十一人、沖縄・南西諸島は九人の計二七六人となった。物故詩人の著作権継承者で連絡が取れない方々が数名おられ、今後も引き続き探しますが、お気付きの方は教えてください。

本書が源泉となり、共通語と方言・地名などを含んだ生活語を駆使する詩人たちが、今後よりいっそう豊かな根源的な詩作へと結実することを願ってやまない。またこの詩選集から日本の詩人の多様性と根源性の魅力を知り、詩の世界に入つてこようとする未知の読者に本書を捧げたい。各地域の朗読会などで活用され、詩を身近にして欲しいと願っている。

(二〇〇八年盛夏)